

草間野分が彼の美しい人に出逢ったのは、丁度アルバイトからの帰り道、すっかり日が落ちてもおなほ生暖かい風が肌に纏わりつく晩夏の頃だった。否、「声を掛けられた」という表現のほうが正しいだろうか。突然後ろから手を取られて、脆いともいえる繊細さと意志の強さを併せ持った、薄茶色の瞳に顔を覗き込まれた。そして、彼は次のように言った。

「なあ、おまえ。俺を抱いてみないか？」

馴染みのない言葉が耳を過ぎる。正確に言うと、単語自体は馴染みのある至極単純なものであったのだが、まさか一つの文として男の人から言われるなど、生まれてからこれまでの十七年十ヶ月、思考に昇ることすらなかったため、誘われたのだというその意味をすぐに理解することができなかった。

「男が嫌なら無理にとは言わないけど」と添えられた言葉も、右の耳から左の耳へと通り過ぎるばかりで、野分は暫く呆けていた。

すると、その美しい人——後に上條弘樹という名だと知る——は、妖しい媚態をそのかんばせに湛え

た。

「ダメか？ 好みなんだ……」

ねっとりとした指。挑発的な眼差し。撓垂れ掛かる肉体が告げる、あからさまな夜のお誘いだつた。

誰かと性的な意味で寝た経験など、野分にはこれまで唯の一度もない。それどころか、恋——誰かを好きになったことすらなかった。

その彼が何故、弘樹が差し出した手を取ったのか、理由は定かではない。我知らず、心ごと絡め取られたのだろうか。云えるのはただ、光に誘い導かれた虫のように、弘樹という目映い存在に引き寄せられたということだけだった。

弘樹に手を引かれるまま、路地裏へと足を踏み入れた。至る所でピンクのネオンが瞬いて、淫猥な空気を醸し出していた。擦れていない良家のお嬢様な